

講座「秦野まち歩き：ジオでみつめてみよう」の実践 —まち歩きで取り上げる「観る要素」の取捨選択—

神奈川県立生命の星・地球博物館 田口 公則・山下 浩之
神奈川県立歴史博物館 丹治 雄一

1. はじめに

地域博物館は、まずその地域を深く知るとともに、地域と深く連携していくことが大切である。また、多様な領域、分野の見方で地域を知ること、つまり多面的な見方も重要となる。さらには、近年、学習指導要領においても「多面的・多角的に考察する力」を重要な力としている（文部科学省、2018）。ひいては、地域博物館での学習においても、多面的・多角的に物事を見る力の育成が求められていると考える。そのためには、まずは地域を重層的に捉え、その内容を学習に活かすことが必要である。筆者らは、歴史学と地質学の「協働研究」で自然史と歴史を一体的に捉えた新たな地域の歴史像が地域理解の促進につながると考え、新しい学習プログラムの試行をすすめている。

本稿では、地学講座「秦野まち歩き」として秦野市本町地区で試行した学習プログラムの実践と参加者の学習効果などについて記したい。

2. 問題の所在：ガイドツアーの懸念

多面的に地域を深掘りするねらいを持ち、複数の専門家（学芸員）を講師として野外観察会を組むことがある。神奈川県立生命の星・地球博物館（以下、地球博）の地学系観察会では、ある地域の地形・地質の要所を複数地点見てまわる形を取ることが多い。いろいろな事物・現象を野外で多数体験するという目的であれば、何の脈絡もない対象物を次々と見ていく形のプログラムもよいだろう。しかし、何らかの主題（テーマ）をもった観察会であるなら、複数の地点で多様な対象物を観察する場合でも、当然その主題に寄り添った事物・現象の観察による構成が望ましい。たとえば、観察地点ごとの内容は、最終的にはその回の主題である地域のストーリーに集約されるなどのシナリオが必要であろう。

一方で、参加者の学びのスタンスにも懸念がある。たとえば、観察地点での対象物の理解で手一杯あるいは表面的な理解で満足し、観察会の主題

を俯瞰して観察事項を関連付けて考える学び、すなわち有意義学習のレベルまで及ばない場合である。観察地点を巡りながら、初めて訪れる土地で講師の解説を聞き、目の前の対象物を理解していく作業だけで手一杯になりがちとなる、という状況を講師側はふまえる必要がある。ましてや、複数領域（分野）の専門家（学芸員）による協働の学習プログラムにおいて、次々と多様な説明が参加者に与えられる状況をふまえると、各説明の関連付けを促す手立ての必要性、重要性に気づく。構成が重層的な観察会であるほど、いかに主体的な深い学びを促すことができるか、はたして観察会参加者は観察事項の関連付けして新しい文脈を生み出すなどの深い学びができているのだろうか、という疑問・懸念を生じる。

これらの疑問から、「地球の事物・現象を重層的に捉えさせ、深い学びを促すにはどのような手立てがあるのか」を確かめるべく、「まち歩き」講座を試行した。

3. 講座「秦野まち歩き：ジオでみつめてみよう」

神奈川県立生命の星・地球博物館友の会（以下、友の会）の地学グループでは、学芸員を講師として、年に数回の地学系観察会・講座を実施している。本稿で紹介する講座「秦野まち歩き：ジオでみつめてみよう」（以下、講座「秦野まち歩き」）は、友の会の地学観察会としてコロナ禍の2021年6月に実施したものである。

(1) 講座開催地（秦野市本町）の概要

講座「秦野まち歩き」の開催場所は、神奈川県秦野市の本町地区周辺である（図1）。本町地区は、水無川と金目川の間位置する地域で、江戸時代には矢倉沢往還（東海道の脇街道のひとつ）道筋にあたる曾屋村に市場（「十日市場」）が開かれ賑わった。また、伊勢原や小田原方面との商品流通も盛んで、大山参詣などの人々も訪れる賑わいがあった（秦野市、1996）。

秦野市の地形の特徴は、丹沢山地と大磯丘陵に

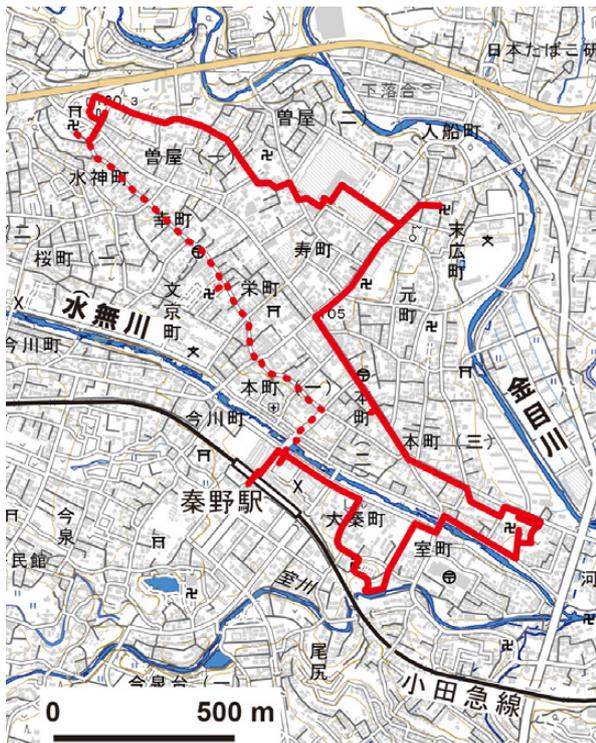


図1 講座実施コース。

囲まれた盆地である。全体的には北西から南東に緩く傾斜する扇状地地形が面をなし、その中央部を水無川が流れる。扇状地を伏流する地下水が豊富で、下流の扇状地端では湧水が多数見られる。しかし、一段高い地形面では、河川地表水は枯渇し、一方、地下水位も低く、ためた飲雑用水にも事欠く状況であり、土地利用の面からみれば、畑作地帯となり、また盆地周辺の高尾から導水する簡易水道を発達させた要因となったのであろう（山崎、1962）。

水無川、金目川沿いには、河成段丘による地形面が発達し、本町地区を含む街並みの多くが台地上にある。この台地（本町地区にあたる旧曾屋村）では、江戸期において曾屋神社に湧出する泉を旧村内に用水を配していた。この用水路を基盤に本町地区（旧曾屋村）では横浜、函館に次いで全国でも極めて早い時期に水道を建設している。

また、この地では、古くからたばこが栽培され、1707年の富士山の宝永噴火以後、たばこ産地として発達し、明治32年に秦野葉たばこ専売所（後の専売局・専売公社）が置かれると「秦野たばこ」はブランド化し大きな産業となった。そして、大正時代に起きた関東大震災からの復興整備が現在の街の基盤につながっている。以上の事柄をキーワードとして挙げるならば、「盆地」、「扇状地」、

「台地」、「地下水」、「用水」、「畑作」、「たばこ」、「街道」、「関東大震災」などとなる。

以上のように、この本町地区を少し垣間見るだけでも「まち歩き」での観察・見学要素となる多様な事物（出来事）とその背景となる歴史が存在することがわかる。講座「秦野まち歩き」では、これらの要素を参加者とともに見つけ、要素が紡ぎ出す文脈を参加者自身が見出すワークショップとすることを目指した。

(2) 講座までの事前準備

フィールド調査：観察対象物

秦野市本町地区での講座開催に向け、まずは筆者のひとり田口がポイント探しと称して、観察要素となる材料探しを行った。重層的に地域を扱う内容をふまえて、事前ポイント探しでは地域資源を見出すことを目標に、地形、景観、石材、石造物、産業、交通、歴史などに注目しフィールドワークをすすめた。その結果、観察候補に挙げたポイントは71点に達した。そのポイント内容をカテゴリーに分け列記すると、石造物27/段丘崖・坂・石垣18/交通5/湧水5/商店・建築4/水道4/川3/地層3/商業2/神社・寺2/地形2/用水2/景観1/産業1/石材1/石碑1、とその対象は多様なものとなった。地域石材である七沢石の石造物を確認したことから石造物の数が多い。また、河川段丘地形を捉えるために、段丘崖・坂・石垣のポイント数も多くなっている。

講座募集にあたっては、友の会地学グループでは初めての「まち歩き」行事であることも考慮し、案内チラシ（A4判片面カラー）を作成した。チラシには、オンライン事前ガイダンスの開催、講座の趣旨や概要を記したほか、上述の観察ポイント候補から選び出した16画像（A: ハ号水源、B: 石段（七沢石）、C: 石垣、D: 湧水、E: 軽便みち（軽便鉄道）、F: 水無川、G: 弘法の清水（湧水）、H: 石祠（七沢石）、五輪塔、I: 水準点、J: 看板建築（五十嵐商店）、K: 全国銘石（石材）、L: 蔵（マルモ印：七沢石）、M: ポスト（タバコ屋）、N: 坂道（段丘崖）、O: 礫層（尾尻礫層）、P: 水無川）を載せ観察対象が多様となることを示した（図2）。

事前ガイダンスの開催

参加者10名、友の会スタッフ2名、講師3名にて、講座当日の一週間前に、オンライン事前ガイダンス（1時間）を実施した。このガイダンスでは、講

友の会地学グループ 行事案内

◆地学観察会

行事名:「**秦野まち歩き:ジオでみつめてみよう**」

講師: 田口公則 (神奈川県立生命の星・地球博物館)

①事前ガイダンス

日時: 2021年6月5日(土) 20:00~21:00 (事前テストは別)

備考: オンライン事前ガイダンス (Zoom を利用)

観察会参加者は事前ガイダンスに参加することを原則とします。参加者には事前に Zoom ミーティング参加アドレスをメールで通知します。

内容: 趣旨説明

フィールドとワークショップのイメージをもつためのガイダンスです。参加者自己紹介、いくつかのポイントを地図で確認、当日までの課題など。

②観察会

日時: 2021年6月12日(土) 10:00~15:00

集合: 秦野駅 詳細は事前ガイダンスでお知らせします。

場所: 秦野駅周辺、水無川、片町通り、イオン、曾屋神社など。

内容: 地図を片手にまち歩き (距離は8km程度の予定)。

水無川がつくる地形の段差を気にしながら秦野界隈を歩きましょう。まずは、坂、崖などを感じその成り立ちを気にしてみる。各地点の標高の把握と記録にも挑戦します。また、昭和レトロな街並みにも目を向けて (=秦野の歴史)、まち歩きをします。石材 (建物の基礎、神社やお寺の石造物など) にも注目します。

坂や面を野外で認識 (体感) するレベル (ミクロ視点) から、その地形の成り立ち (マクロ視点) の理解、さらには秦野の歴史を加味して、地形と人の生活空間をイメージすることをめざします。おわりの時間には、秦野のまち歩きを通しての発見を、参加者のみなさんと一枚の地図にまとめるワークショップをします。

備考: マスク着用のごこと

③参加申し込み方法

対象: 友の会会員

オンライン事前ガイダンス (Zoom を利用) に参加できること

募集: 10名 (募集人員を超えた時は抽選)

費用: 保険代 50円 (観察会当日、受付時に徴収します)

申し込み

往復ハガキにて参加申し込みをすること

記載事項: 行事名・氏名・性別・年齢・郵便番号と住所・電話番号・メールアドレス

申込先: 〒250-0031 小田原市入生田 499 生命の星・地球博物館友の会

申込期限: 5月25日(火) 必着のこと

問合せ先:

担当者 友の会地学グループ 045-821-1111 045-821-1112 045-821-1113

※状況によっては中止も考えられますので、ご承知おきください。

写真説明

A: 八号水源, B: 神社階段, C: 石垣, D: 湧水, E: 軽便鉄道, F: 水無川, G: 弘法の清水, H: 石造物, I: 水準点, J: 看板建築, K: 銘石図鑑, L: 建物の石材, M: 郵便ポスト, N: 坂道, O: 礫層, P: 流れる水の働きを考える



図2 講座案内チラシ。

座趣旨説明、参加者自己紹介、巡るフィールドの概要説明などを持った。

講座趣旨説明では、講座のねらい『ジオ:地形・地質だけでなく、地域の地理・歴史 (人の生活) を含めながら、重層的に地域を捉える』を目標として、参加者とともに試行する講座であることを強調した。すなわち、通常は案内者が解説をしながらフィールドを巡るというスタイルを、できるだけ参加者が主体的に参加する仕掛けを設けたワークショップスタイルにすることを参加者に宣言した。

スタッフおよび参加者の自己紹介の後、当日巡るフィールドの紹介を行った。地図サイト等を用いての位置確認のほか、当日配布する資料 (3つの地図) を紹介した。その地図とは、(1) 観察ポイント地点を記した地理院地図、(2) 曾屋村の古地図 (天保6年)、(3) 古い地形図 (昭和8年) の3つである。地理院地図では「色別標高」「傾斜量図」を用いて地表の起伏が見やすい地図を作成し、URLの共有により該当地図をガイダンス後にも閲覧できるようにした。曾屋村の古地図は、秦野市所蔵のもので、小学校の副読本などでも紹介されてい

る地図である。オンラインでの閲覧性をふまえて「秦野さんぽ」（秦野市観光協会，2021）に掲載の古地図画像を紹介した。また旧版の地形図は軽便鉄道が表現されている昭和8年の1/25000地形図を利用した。

また、ガイドランスの要として、当日の巡り方の共有を重ねて行った。つまり、観察ポイントを手掛かりに当日は地域をぐるりと巡ること、そして当日のまとめとしてグループごとに分かれて地域文脈を考えるワークショップを行うことを案内した。

（3）講座内容

まち歩きコースと内容

講座当日は、3つの地図を持ちながら、秦野駅を起点に本町地区をぐるりと巡る「まち歩き」となった。コースを図1に示す。各ポイント地点では、講師の田口が中心となり参加者への問いかけや解説を行ったほか、観察対象に応じて、丹治、山下が解説した。10時に開始、コース途中の曾屋水道公園でまとめのワークショップを行い、一旦終了とした。

当日のコース内容のあらましは、地形的段差（高度差）の実感と河岸段丘の認識、高低差のある箇所での石造物（石段、石垣）の存在、扇状地端での湧水、軽便鉄道の需要と敷設ルート、寺社の石造物、段丘礫層、看板建築など歴史的建造物、地元産業とたばこ栽培、近世の用水、近代水道、断層地形と湧水などの観察・見学となった。

コースの詳細として、参加者の蓮池氏による報告（蓮池，2021）をつぎに一部引用する。

6/12(土) 秦野駅北口中二階に集合、講師の挨拶で地図（古地図、色別標高付き地形図など）を片手に水無川の地形の段差を感じながら秦野界隈を歩く（8kmほど）。坂、崖など標高を把握し、建物、寺院の石材などを見ながら秦野の歴史に想いを馳せ街歩きを楽しむ。1週間前にZoomによるオンライン事前ガイドランスがあり地図でポイント確認を行っていた。3班に分かれ街歩きのストーリーを纏めてとのレクチャーがあった。まず手始めに駅の南口（98m→標高）へ、湧水の看板を見ながら街歩きエリアの全体把握、その後北口（92m）へ移動、階段の長さで水無川側の低いことを実感。その後、弘法の清水（87m）へ、地下水や脇の灯籠の石材解説。

奥に向け坂道を上がり寿徳寺裏（89m）へ。右手に崖の石積み、墓地階段上の灯籠の石材確認、寺院入口（92m）へ、各所で七沢石を見る。

その後坂道を右手に下り、田んぼで湧水（85m）確認。さらに水無川北側を命徳寺へ、境内で灯籠の石材解説、裏山に回り石塔、五輪塔の石材解説、さらに尾尻礫層（2～1万年前）を確認しここが河だったことを認識。ぐるっと左周り河原町バス通りから命徳寺裏山の公園（81m）へ、関東大震災後の震災犠死者供養塔（井内石（稲井石））の解説をうけ、ここで昼食。

その後軽便鉄道始発だった台町駅（89m）の碑を確認、道路を隔てた先にタバコ屋と朱色の懐かしい郵便ポストを見て台町が始発駅だったことを偲ぶ。台町通り左側を進み、向かいの立花屋茶舗、その先に五十嵐商店（97m）（国登録有形文化財）の解説、隣家の蔵の土台の空気穴の○モと刻まれた礎石確認。さらに先の本町四ツ角（101m）を右折、イオン入り口を通り過ぎ妙法寺境内へ（99m）。関東大震災後、専売局の職員が建てた灯籠の解説をうける。

イオン入り口に戻り、台町駅から延長された秦野駅の碑（100m）を確認のあと、旧専売公社のくすのき広場（105m）で休憩。その後古地図の道を曾屋神社に向けて歩く。昔の水道は傾斜を利用して各戸に配水するため水源に向かってずっと登り坂、神社手前に近づくほどに坂がきつい。曾屋神社の山側こんこんと湧き出る井之明神水（121m）、右手246側は崖であったことが分かる。コンクリート壁からも水は浸み出ている。このあたりが秦野断層、断層の脇からの湧水が昔の水源。神社（123m）では石段、灯籠、大震災で折れ修復された鳥居の解説。

そののち乳牛通りの碑を確認、水道公園（119m）で班ごとの街歩きのストーリー作り。「台地の上は流しソーメン」「台地にお世話になった水源、たばこ作り」「秦野の発展は断層のおかげ」などで締めくくった。駅へは119→92mの高低差27mの緩い坂道を歩きながらスタート地点に戻った。

この参加者報告からも本講座「まち歩き」では多様な対象物を観察したことがわかる。また、各ポイント地点での標高が記していることから、報告者が地形高度にも注意を向けていたことがうか



図3 キーワードを見つけるワークショップ。

がえる。

講座のまとめとして、参加者が3グループに分かれ4人でのワークショップを行った。グループに与えられた課題は、(1) 本講座で見出されるキーワードを挙げること、(2) キーワードから見出される地域の文脈(わかりやすく言い換えると講座のストーリー)を作ること、の2題である。当初は大きな白地図上にキーワードを書き出し、大きく文脈を記す作業を想定していたが、公園でのワークショップとしたために、クリップボード上の地図と付箋を用いながらキーワードを挙げていくことにした(図3)。

最後に、各班からキーワードと地域文脈の発表を行い全体共有とした。このキーワードと地域文脈については、参加者アンケートにおいても集計した。

(4) 事後のアンケート結果から

講座終了時に、参加者およびスタッフ(計12名)に対して事後アンケートを実施し、その場でもしくは後日回収した。集計結果(11名分)の一部を紹介する。

新しい講座の試みに対する満足度

「新しい講座試みに満足しましたか?」の問いに対して回答者11名全員が、「満足した」と回答している(「満足した」、「どちらともいえない」、「満足できなかった」の3項目から選択)。講座企画に対して一定の理解を得られたことがうかがえる。

地形や地質、歴史などへの興味の広がり

「地形や地質、歴史などへの興味は広がりましたか?」の問いに対しては、回答者11名全員が、「広がった」と回答(「広がった」、「広がらない」の2

項目から選択)。

地域を重層的(多面的・多角的)に捉える意識

「自然的な要素(地形・地質・自然誌など)と人文的な要素(歴史・街のデザイン)を、多層的・多面的に捉えることができましたか?」の問いに対して、回答者11名全員が「できた」と回答している(「できた」、「できない」の2項目から選択)。

はたして、どのように多層的・多面的に捉えているのか具体的なことはわからないが、重層的に捉える意識の感覚を持つことはできたものと推測する。

参加者が見出したキーワード

回答者11名が挙げたキーワードを共通項にまとめ整理したものを回答数が多い順に列記するとつぎとなる。

七沢石/湧水/河岸段丘/たばこ・落花生/断層(断層地形)・秦野断層/水無川/水源/扇状地/軽便鉄道/台地/盆地/傾斜・坂道/水害・氾濫/被災・震災/水/伏流水・地下水/丹沢山地/渋沢丘陵/石仏/慰霊碑/箱根後期火口丘の石/登録有形文化財/林場/矢倉沢往還/小田原宿往還/石材の流通網/老舗/道(昔と現在)/用水路/尻尻礫層

「七沢石」、「湧水」、「河岸段丘」、「たばこ・落花生」、「断層(地形)・秦野断層」に触れた回答が目立つ。講座中に「七沢石」の確認ポイントが多数あったことが反映されていると思われる。

参加者が見出した「地域文脈」

グループでのワークショップでも取り上げた「地域文脈」について、各人にも一言による表現を求めた。回答者11名の回答はつぎとなる。

- ・人々は段丘上に住むことを選択しタバコ栽培で繁栄を築いた
- ・水とたばこで活かしてきた台地、これからは何で?
- ・扇状地で盆地で断層に挟まれた湧水の町
- ・自然を活用した生活の変遷
- ・秦野の発展は断層のおかげ
- ・水脈、治水で街が形成される
- ・はだの台地とこれからの街づくり
- ・秦野は、扇状地+断層+タバコ+七沢石
- ・秦野盆地と湧水(地下水)活用の町

- ・曾屋村の台地の上は流しそうめん
- ・軽便鉄道と段丘、湧水とその利用・用水路

ワークショップの効果もあってか、回答者全員、自分が見出した地域文脈を一言での表現で作り出している。

ひとつの単語によるキーワードだけでは文脈を記すことは難しいが、フレーズであればいくらかの文脈が見えてくる。「台地の上は流しそうめん」の表現のように、地形と用水の特徴を身近な流しそうめん例えながら上手に地域文脈を捉えたものもある。このような文脈を作るには、講座当日の観察に加えて、背景知識や俯瞰するスキルが求められる。この参加者は、当日の講座内容を、多面的に重層的に捉えているはずである。講座の中で見出した複数の要素を関連付けて俯瞰するという力が必要である。もしかすると、案内者であった講師よりも地域を多面的・多角的に深く理解していることも予想される。地域文脈を表現・表示する課題は、地域の文脈を理解するうえで大きな効果を持つ例といえるだろう。

参加者が見出した地域文脈のそれぞれのフレーズは、「秦野まち歩き：ジオでみつめてみようでの語彙」と見することもできる。これは「地域文脈」を「地域の語彙」への言い換えが見えてきたということである。つまり、その講座での個別的な文脈という多様性を含む語彙であり、それぞれの立場からの視点であり、すなわち多角的に見るということにつながっている。本講座の背景にある「地域の事物・現象を重層的に捉えさせ、深い学びを促すにはどのような手立てがあるのか」という問いに対して、「領域をまたぐ多様なキーワード」と「地域文脈の発見」という2つのステップが有効であることがささやかながら見えてきたといえる。

4. おわりに

地域を対象とした講座・観察会において、専門領域・分野を超えた多様な事象を対象とするパターンが増えてきている。各地での実践が広まっている「まち歩き」がそのひとつである。

本稿で報告した「秦野まち歩き」は、筆者らにとって初めての試行であったが、参加者の反応や参加者が見出した「地域文脈」をみると、そこには領域を越えた多様な要素を地域に関連付けてひとつの文脈として捉えるという深い学びの可能性がみえてきた。学校教育では「多面的・多角的に考察」という態度が求められているが、博物館においても多面的・多角的に考察するスキルを大いに発揮することで地域理解が深まることを期待する。この方向性は、その場所（地域）の専門家であるトコロジスト（浜口, 2006）を育て、やがてはトコロジスト同士によるワークショップの展開につながるものであろう。

謝辞

講座運営では、地球博友の会地学グループ講座担当の長山武夫さんに献身的なサポートをいただいた。礫層露頭の観察、石造物の観察では命徳寺に許可と現場でのお世話をいただいた。旧地形図の収集では生命の星・地球博物館学芸員の新井田秀一氏にお世話になった。以上のみなさまならびに、本実践の場をいただいた神奈川県立生命の星・地球博物館友の会に感謝申し上げる。

本研究は、JSPS科研費JP18K01111の助成を受けたものである。

文献

- 蓮池鶴夫（2021）活動報告「秦野まち歩き：ジオでみつめてみよう」．友の会通信, 25(2) :7-8.
- 秦野市（1996）図説・秦野の歴史．「図説・秦野の歴史」編集委員会編, 239p.
- 秦野市観光協会（2021）曾屋村（現在の本町四ツ角周辺）の古地図．秦野さんぼ, 45: 3.
- 浜口哲一（2006）「自然観察の進め方」．エッチエスケー, 72p.
- 文部科学省（2018）中学校学習指導要領（平成29年告示）解説（社会編）．237p.
- 山崎寿雄（1962）秦野盆地の水源について．東北地理, 14(3) : 93-102.